

## 妊娠期の女性の心理的变化についての理解

### —半構造化面接と母子画を通して—

Study on psychological changes of pregnant women  
—from the Semi-structured Interviews and Mother-and-Child-Drawing—

神沢 美波  
Minami Kamizawa

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード : 妊娠出産, 心理的サポート, 母子画

Key words : Pregnancy childbearing, Psychological support, Mother-and-Child-Drawing

#### 1. 研究目的

##### (1) 問題の背景

近年, 女性の社会進出が推進されている. 内閣府 (2007) は「仕事と生活の調和 (ワーク・ライフ・バランス) 憲章」を掲げ, 「仕事は, 暮らしを支え, 生きがいや喜びをもたらす. 同時に, 家事・育児, 近隣との付き合いなどの生活も暮らしには欠かすことはできないものであり, その充実があってこそ, 人生の生きがい, 喜びは倍増する.」としている. 子育てと, 仕事をバランスよく行うことが, 母親の精神的健康のためには重要であるといえる.

しかし実際には, 最近ニュースでも取り上げられているように, 保育所に入れられないなどの問題で働くことが難しい場合もある. また, 子どもが急に体調を崩すなどということもあるため, 働きながらの育児には困難も多く, 周囲からのサポートなくしては難しいのが現状であるといえるだろう.

また, 日本の風潮として, 大日向 (2000) は, 「母性愛神話」という言葉を用い, 未だに「子育ては女性がすべきであり, こなせて当たり前だと考える風潮」があることを指摘している. そして, 育児の責任を負わされた母親は大きな不安を抱いていると述べている. イクメンという言葉もあるが, まだまだ父親の育休取得率は低いと言わざるを得ず, 母親には育児と, 育児の責任という面で負担が大きいといえるだろう.

近年, 児童虐待の増加が大きな問題となっている. 虐待による死亡事例の約 6 割が 0 歳児という平成 26 年度の調査結果 (厚生労働省, 2016) を受

け, 厚生労働省は地方公共団体に対し, 「妊婦が抱えている不安感を軽減するアプローチの実施」を提言している.

また, 妊娠期は身体的にも心理的にも非常にリスクの高い時期となる. 医療技術の発展により, 妊娠出産による死亡率はかなり減っているものの, 出産は生と死が隣り合わせだという事実が変わりはない. 心理的にも, 自分だけの体ではないことや, 身体的な変化を受け入れることが必要となり, 一人の女性が母親として生まれなおす時期となる. 永田 (2011) は, 「親として生まれなおすこの時期, 女性は赤ちゃんと同じように傷つきやすく, 無防備になってしまう」と述べ, さらに, 「この時期を暖かい見守りの中で過ごすことができるかどうかは, 親のメンタルヘルスやその後の親子関係にも多かれ少なかれ影響を及ぼしていく」と述べている. また, 永田 (2011) は, 「産後の母親は身体的な回復や赤ちゃんのケアに時間がとられ, 外出にも負担がかかる」と述べている. 産後しばらくは外出することが難しく, 支援を求めることが難しくなる場合も多いため, 妊娠期からの継続した心理的支援が必要であると考えられる.

母子画はギレスピー (1994) が考案した描画法であり, 本人も意識していない母子や妊娠に対するイメージが表現されている. 対象関係論を理論的背景としており, 表現された母親像と子ども像の関係は, 被験者の心の中に住む母親と子どもの関係を表しているとされている. 本邦では馬場 (2005) が母子画から対象関係の大まかな解釈を可能にするために, 大学生を対象に調査を行い,

表情・身体接触・アイコンタクトの表現型を順序尺度として数量化している。今関ら (1987) は女子学生に対して母子画と、「母性」についての自由連想を実施し、結果から、「母子画や自由連想によるスクリーニングを行い、ネガティブな母性イメージを持つ女性への援助を提供することが育児ノイローゼや虐待の防止につながる」と、母子画の有用性について述べている。

そこで本研究では、妊娠期から出産後の女性の心理的变化を明らかにすること、そして、身体的にも心理的にもリスクの高い、妊娠期・出産後の女性の心の安定に寄与するサポートを明らかにすることを目的としてインタビューと母子画により研究を行う。また、本研究では、働きながら子育てを行う女性に焦点を当てて研究を行う。仕事をすることは、女性が自分自身の人生を生きるために重要である。さらに、近年では労働力不足の問題もあり、働きながら子育てをする女性は、今後とも増加すると考えられる。働きながら子育てを行う女性を対象に研究を行うことで、女性が働きながら子育てを行う際に感じている困難や必要な心理的サポートを明らかにする。

## (2) 方法

第 1 研究では、妊娠・出産前の女性と出産経験のある女性の、妊娠・出産・赤ちゃんについての捉え方の特徴を量的に比較検討する。また、第 2 研究で使用する母子画の基礎資料の収集を行う。

第 2 研究では、出産後の母親に妊娠期の出来事やそれに伴う気持ち、心の安定に寄与するサポートを明らかにするために、言語的・非言語的の両側面から分析を行う。

### 第 1 研究

- 1) 対象者：女子大生 100 名、出産経験のある女性 100 名。
- 2) 方法：①自由記述：妊娠出産についてのイメージを自由に記述してもらう。  
②母子画：「母と子の絵を描いてください」と教示し、A4 用紙に 2B の鉛筆で母子の絵を描いてもらう。  
③対児感情尺度改訂版 (花沢, 1992)：「あたたかい」「うれしい」などの接近に関する項目 14 項目、「よわよわしい」「はずかしい」などの回避 14 項目、計 28 項目。4 段階評価で行う。
- 3) 分析：自由記述データは KJ 法で分析し、女子大生と出産経験のある女性それぞれの、妊娠・出産についてのイメージについて比較検討を行う。

母子画は馬場の分析基準を参考に数値化し、対児感情尺度とともに量的に分析を行う。

### 第 2 研究

- 1) 対象：第 1 子出産後 2 年以内の働いている女性 4 名。
- 2) 方法：①半構造化面接：時系列に沿って、「妊娠を知った時、妊娠中、出産、出産後、それぞれの時期の出来事や気持ち、サポートについて」質問をする。第 1 研究の自由記述の結果から、さらに質問項目を検討する。  
②母子画：第 1 研究と同じ手続き。  
③対児感情尺度：第 1 研究と同じ手続き。
- 3) 分析：半構造化面接のデータは複線経路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model : TEM) で分析を行う。半構造化面接からデータを逐語化し、切片化を行い、時間順にそれぞれの調査協力者の出来事を並べる。TEM では調査協力者 1 人につき 3 回面接を行う。

1 回目に面接を行い、図としてまとめたものを、2 回目の面接で協力者と話し合いながら修正し深め、さらにもう一度修正したものをもとに話し合う。1 人につき 3 回面接を行うことで、より深く、正確なデータを得ることが可能となる。

### 第 2 研究

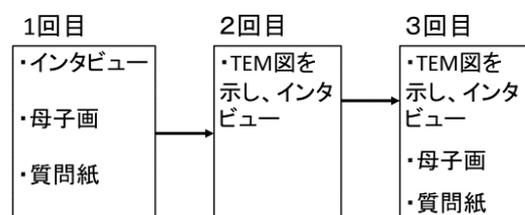


図 1. 第 2 研究の手順

本研究では、半構造化面接と母子画を組み合わせることで、言語的な側面と非言語的なイメージとの両面から質的に分析を行い、妊娠・出産における心理的变化と必要なサポートを明らかにすることが可能になると考えられる。

## 2. 研究実施内容

研究に必要な、妊娠・出産、母子画等についての知識を深めるため、妊娠・出産については大日向 (1988) (2000)、永田 (2011) (2016) を中心に文献を読み進めた。母子画については馬場 (2005) や今関 (1987)、TEM についてはサトウ (2009)

を中心に文献を読み進めた。日本心理臨床学会第 35 回大会に参加し、妊娠期から出産後における心理的プロセスについての研究の意見交換を行った。妊娠・出産・育児の切れ目のない支援についてのシンポジウムを聞いたりすることで、研究に関する最新の知見を得ることができた。

11 月に研究計画を完成させ、調査用紙を作成した。

12 月から地域の子育て支援センターで実習を開始し、利用者の方々と実際に話をする中で、妊娠・子育て期の母親への心理的サポートについての理解を深めている。実習は 2017 年 5 月までを予定している。

2 月には、大妻女子大学生命科学研究倫理委員会から、研究計画についての承認を得た。3 月には専攻内で行われる修士論文構想発表会にて発表を行い、様々な指摘を得て、より詳細な研究計画へと改善を行った。

### 3. まとめと今後の課題

妊娠・出産、母子画についての理解を深め、妊娠期から出産後の女性への心理的サポートを明らかにするために必要な研究計画を完成させた。また、大妻女子大学生命科学研究倫理委員会から、研究を行うための承認を得た。2017 年 4 月からは、第 1 研究の調査用紙の配布と回収を行い、6 月までに分析と結果・考察のまとめを行う。7 月～11 月に第 2 研究の半構造化面接を実施し、12 月～1 月に分析と結果・考察をまとめ、1 月 31 日に修士論文としてまとめ、提出する。

### 引用文献

- 馬場史津 (2005) 母子画の基礎的・臨床的研究 北大路書店
- Gillespie, J. (1994) The Projective Use of Mother and Child Drawings: A manual for clinicians. New York: Brunner/Mazel. 松下恵美子・石川 元 (訳) (2001) 母子画の臨床応用—対象関係論と自己心理学 金剛出版
- 花沢成一 (1992) 母性心理学 医学書院
- 今関節子・高田知恵子・田村文子・寺田真廣・横田正夫 (1987) 質問票と描画テストによる母性イメージの検討 群馬大学医療技術短期大学部紀要 8, 109-115, 1987.
- 厚生労働省 (2007) 仕事と生活の調和の実現に向けて <<http://www.cao.go.jp/wlb/government/index.html>>
- 厚生労働省 (2016) 子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について (第 12 次報告) <<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/000137028.html>>
- 永田雅子 (2011) 周産期のこころのケア 遠見書房
- 永田雅子 (編) (2016) 別冊発達 32 妊娠・出産・子育てをめぐるこころのケア ミネルヴァ書房
- 大日向雅美 (1988) 母性の研究 川島書店
- 大日向雅美 (2000) 母性愛神話の罫 日本評論社
- サトウタツヤ (2009) TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして 誠信書房